

余と万年筆

夏目漱石

此間魯庵君ろあんに会った時、丸善の店で一日に万年筆が何本位売れるだろうと尋ねたら、魯庵君は多い時は百本位出るそうだと答えた。夫それでは一本の万年筆がどの位長く使えるだろうと聞いたら、此間横浜よこのもので、ペンはまだ可なりだが、軸じくが減ったから軸丈だけ易かえて呉くれと云って持って来たのがあるが、此人は十三年前に一本買ったざりで、其一本を今日まで絶えず使用していたのだというから、是これがまあ一番長い例らしいと話した。して見ると普通の場合ではいくら残酷に使っても大抵六七年の保証は付けられるのが、一般の万年筆

の運命らしい。一本で夫程長く使えるものが日に百本も出ると云えば万年筆を需用する人の範圍は非常な勢を以て広がりがりつつあると見ても満更見当違いの觀察とも云われない様である。尤も多し中には万年筆道楽という様な人があつて、一本を使い切らないうちに飽が来て、又新しいのを手に入れたくなり、之を手に入れて少時すると、又種類の違つた別のものが欲しくなるといった風に、夫から夫へと各種のペンや軸を試みて嬉しがるそうだが、是は今の日本に沢山あり得る道楽とも思えない。西洋では煙管に好みを有つて、大小長短色々取り交ぜた一組を綺麗に暖炉の上などに並べて愉快がある。単に蒐集狂という点から見れば、此煙管を飾る人も、盃を寄せる人も、瓢箪を溜める人も、皆同じ興味に駆られるので、同種類のものうちで、素人に分らない様な微妙な差別を鋭敏に感じ

分ける比較力の優秀を愛するに過ぎない。万年筆狂も性質から云えば、多少実用に近い点で、以上と区別の出来ない事もないが、強いて無くても済むものを五つも六つも取り揃えるのだから今挙げた種類の蒐集狂と大した変りのある筈がない。ただ其数に至っては、少なくとも目下の日本の状態では、西洋の煙管氣狂の十分の一も無からうと思う。だから丸善で売れる一日に百本の万年筆の九十九本迄は、尋常の人間の必要に逼られて机上若くはポケット内に備え付ける実用品と見て差支あるまい。して見ると、万年筆が輸入されてから今日迄に既に何年を経過したか分らないが、兎に角高価の割には大變需要の多いものになりつつあるのは争う可らざる事実の様である。

万年筆の最上等になると一本で三百円もするのがあるとかいう話

である。丸善へ取り寄せてあるので既に六十五円とかいう高価なものがあるとか聞いた。固もとより一般の需要は十円内外の低廉ていれんな種類に限られているのだろが、夫それにしても、一つ一銭のペンや一本三銭の水筆に比べると何百倍という高価に当るのだから、それが日に百本も売れる以上は、我々の購買力が此の便利ではあるが贅ぜい沢品と認めなければならぬものを愛玩あいかんするに適当な位進んで来たのか、又は座右ざいゆうに欠くべからざる必需品として価の廉不廉に拘かわらず重宝ちゆうぼうがられるのか何方どちらかでなければならぬ。然しかし今其原因を一つに片付けるのは愚ぐの至として、又事実の許す如く、しばらく両方の因数が相合して此需要を引き起したとして、余はとくに余の見地から見、後者の方に重きを置きたいのである。

自白すると余は万年筆に余り深い縁故もなければ、又人に講釈す

る程に精通していない素人しろうとなのである。始めて万年筆を用い出してから僅か三四年にしかならないのでも親しみの薄い事は明らかに分る。尤も十二年前に洋行するとき親戚のものが餞別せんべつとして一本呉れたが、夫はまだ使わないうちに船のなかで器械体操の真似まねをしてすぐ壊して仕舞しまった。夫から外国にいる間は常にペンを使って事を足していたし、帰ってから原稿を書かなくてはならない境遇に置かれても、下手な字をペンでがしがし書いて済ましていた。それで三四年前になって何故万年筆に改めようと急に思い立ったか、其理由は今一寸思ちよつとい出せないが、第一に便利という実際のな動機に支配されたのは事実に違ちがない。万年筆に就つて何等の経験もない余は其時丸善からペリカンと称するのを二本買って帰った。そうして夫をいまだに用いているのである。が、不幸にして余のペリカンに対する感想

は甚だ宜しくなかつた。ペリカンは余の要求しないのに印氣を無暗にぼたぼた原稿紙の上へ落したり、又は是非墨色を出して貰わなければ濟まない時、頑として要求を拒絶したり、随分持主を虐待した。尤も持主たる余の方でもペリカンを厚遇しなかつたかも知れない。無精な余は印氣がなくなると、勝手次第に机の上にある何んな印氣でも構わずにペリカンの腹の中へ注ぎ込んだ。又ブリュー・ブラックの性来嫌な余は、わざわざセピヤ色の墨を買って来て、遠慮なくペリカンの口を割って吞ました。其上無經驗な余は如何にペリカンを取り扱ふべきかを解しなかつた。現にペリカンが如何に出洩つても、余は未だかつて彼を洗濯した試がなかつた。夫でペリカンの方でも半ば余に愛想を尽かし、余の方でも半ばペリカンを見限つて、此正月「彼岸過迄」を筆するときには又一と時代退歩して、

ペンとそうしてペン軸じくの旧弊な昔に逆戻りをした。其時余は始めて離別した第一の細君を後から懐なつかしく思う如く、一旦見棄みすてたペリカんに未練の残っている事を発見したのである。唯ただのペンを用い出した余は、印氣インキの切れる度毎たびごとに墨壺すみつぼのなかへ筆を浸ひたして新たに書き始める煩わづらわしさに堪たえなかつた。幸にして余の原稿が夫程それほどの手数はぶが省けたとて早く出来上る性質のものでもなし、又ペンにすれば余の好むセピヤ色で自由に原稿紙を彩いろどる事が出来るので、まあ「彼岸過迄」の完結迄はペンで押し通す積つもりでいたが、其決心の底には何どうしても多少の負惜しみが籠こもっていた様である。

余の如く機械的の便利には夫程重きを置く必要のない原稿ばかり書いているものですら、又買い損なつたか、使い損なつたため、万年筆には多少手古擦てこざっているものですら、愈いよいよ万年筆を全廢すると

なると此位の不便を感じずる所をもって見ると、其他の人が価の如何いかんに拘かかわらず、毛筆を棄すてペンを棄すてて此方こちらに向うのは向う必要があるからで、財力ある貴公子や道楽息子どうらくむすこの玩具に都合のいい贅沢品ぜいたくひんだから売れるのではあるまい。

万年筆の丸善に於おける需要をそう解釈した余は、各種の万年筆の比較研究やら、一々の利害得失やらに就つて一言の意見を述べる事の出来ないのを大いに時勢後れの如くに恥じた。酒呑さけのみが酒を解する如く、筆を執とる人が万年筆を解しなければ済まない時期が来るのはもう遠い事ではなからうと思う。ペリカン丈だけの経験で万年筆は駄目だという僕が人から笑われるのも間もない事とすれば、僕も笑われないうちに、少しは外ほかの万年筆も試してみる必要があるだろう。現に此原稿は魯庵君ろあんが使って見ろといつてわざわざ贈って呉くれたオノトで

書いたのであるが、大変心持よくすらすら書いて愉快であつた。ペ
リカンを追い出した余は其姉妹に当るオノトを新らしく迎え入れ
て、それで万年筆に対して幾分か罪^{つみ}亡^{ほろ}ぼしをした積^{つもり}なのである。

使用書体

かな／欣喜堂お、はなぶさM

漢字・約物・記号／リュウミン Pro W2

欧文・数字／Adobe Garamond Pro Regular

公開 二〇二三年二月一日

組版 @yundtom

底本

「筑摩全集類聚版 夏目漱石全集 10」筑摩書房

一九七二（昭和四七）年二月一〇日第一刷発行

※吉田精一による底本の「解説」によれば、発表年月は、

一九二二（明治四五）年六月三〇日。

入力

Zana ohbe

校正

米田進

二〇〇二年五月一〇日作成

二〇五年二月四日修正

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。